

第四十八卷第三號 昭和十四年三月一日發行
大正四年六月二十一日第三號發行

東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十四卷(第三號)

昭和十四年三月

論叢

政府支出と所得増加……………文學博士 高田保馬
横井小楠の經濟思想……………經濟學博士 本庄榮治郎
特殊リンク制の諸問題……………經濟學博士 谷口吉彦

時論

支那に於ける門戶開放……………法學博士 末廣重雄
増稅案を論ず……………經濟學博士 汐見三郎

研究

神代に現はれし日本の創造の型……………經濟學士 中川與之助
公正價格の意義……………經濟學士 中谷實
靜態的貨幣理論と動態的貨幣理論……………經濟學士 服部新一
複式簿記法の形成過程に就いて……………經濟學士 岡本愛次

說苑

ル・プレールの經濟發達階段說……………經濟學士 宮本又次

附錄

彙報
外國雜誌論題

(禁轉載)

説苑

ル・プレールの經濟發達階段説

宮本 又次

歴史學派の遠き先蹤を吾々は佛蘭西のシモンド・ド・シスモンディ (Simonde de Sismondi) に於て窺ふことが出来るが、その發展は昔ねく知らるゝ如く獨逸に於て絢爛の花を咲かせたものであり、その種々の立場・基準よりなざるゝ數々の階段説は經濟史研究の尺度として孰れも高き價値を有すべきものであるに對し、佛蘭西に於てはそれに關し見るべきものなく、やゝ寂寞の感を覺えざるを得ない。勿論古くジャン・ボダンが民族の文化的發展を(一)宗教時代(東洋民族)(二)政治時代(地中海民族)(三)經濟時代(北方民族)に分てるあり、モンテスキューは生活資料の種類によつて(イ)果實採

ル・プレールの經濟發達階段説

集者(ロ)漁魚民(ハ)狩獵民(ニ)牧畜民(ホ)農耕民(ヘ)商人及工業者に類別し、ケネーも亦(イ)狩獵民(ロ)漁魚民(ハ)牧畜民(ニ)農耕民(ホ)商業民(ヘ)遊牧民・未開人・天幕生活民・掠奪生活民に分ち、コンドルセー亦人類の進歩を九階段に分けてゐるが、ル・プレール (Ferdinand La Plan) 及其の學派のそれは、以上のものに比し、一層捨て難き特徴を有するに拘らず、從來割合に閑却されてゐたやに考へられるから、茲ではその大様を紹介して見たいと思ふ。

二

ル・プレール(一八〇六一—一八八二)は佛蘭西オンフリユール近傍の一村落に生れ、巴里の理工科學校卒業後、鑛山技師・鑛山學校教授等を経、政界に出て一八六七年上院議員となつた。彼は一八五五年に「歐洲の勞働者」(Les ouvriers européens, 6 vols) を出版し、更に一八六四年に「社會改良論」(La réforme sociale en France) を出した。彼は永年に互つて歐洲全土をウラルに至る迄遍歴し、その經驗と觀察とを基礎とする研究法をとり、想

第四十八卷 五八七 第三號 一四七

1) H. Proesler; Die Epochen der deutschen Wirtschaftsentwicklung, pp. 20, et sqq.
2) 米田庄太郎、經濟心理の研究、143頁。

像的研究法 (La méthode d'invention) を侮視した。彼は家族を以て社會の基礎的單位と看做したが、それは過去の歴史を繙ね、その生活様式を述べ、その生活資料を分析することによつて得た結論であつた。かくの如く觀察法・比較法を重んじ、且つ古典的なる自由主義・樂天主義に反抗せし點に於て、内面に於ける微細なる差異にも拘らず、非常に獨逸歴史學派に接近せるものを認めざるを得ない。

ル・プレールの大著「歐洲の勞働者」は、その後「二大陸の勞働者」(Ouvriers des deux mondes) の名稱の下に、彼の學流を汲む人達により研究を重ねられ、又彼は一八五六年社會經濟學會 (La Société Internationale des Etudes Pratiques d'Economie Sociale) を設け、一八八一年より「社會改良」(La réforme sociale) なる雑誌を發刊したが、後分裂を起し、一は依然 La Réforme Sociale に據るに對し、他は La Science Sociale を機關雜誌として研究を進めるに至つた。前者は大體に於て、ル・プレールの方法をその儘採用せしも、後者はル・プレールの純客觀

的方法を尊重するが、更に一步を進め、類別的研究法即ち諸事實を理解するに當つて、その自然的關係に應じて排列し、此等の事實と地理的環境との關係を究めんとした。嘗てル・プレール自身も社會の基礎的要素として土地と人口とを見出し、環境を重視はしてゐるが、この「社會科學」派は恰も勃興し來りしブラッシュの人文地理學に影響され、益々重要性を環境に附與したのであつた。この派の頭目としては Henri de Tourville, Demolin, Paul de Rousiers を挙げ得るであらう³⁾。それはともあれ、ル・プレールの歴史哲學が最も完全且つ組織的に展開・集大成されたのはヴィーニユ (Vignes) の La science sociale d'après les principes de Le Play et ses continuateurs に於てであらう。又オーブールタン (Auburtin) の Frédéric Le Play, d'après lui-même はル・プレール著作よりの抜萃として有益なる文集である。以上の二書に依つてル・プレール及ヴィーニユの歴史哲學に就き經濟發達階段説と目すべきものを窺ひ行かう。

3) 傳記に關しては、Gonnard, Histoire des doctrines économiques, pp. 632-641, Gide et Rist, Histoire des doctrines économiques, p. 580-598, Sorokin, Contemporary Sociological Theories, による所が多い。

ル・プレーは社會の基礎的單位を家族なりとし、之を家長的家族 (la famille patriléale) 一系的家族 (la famille souche) 不定的家族 (la famille instable) の三形態に分類してゐる。第一の家長的家族は共同の祖先を有する多數の家計の共同の厨爐を中心とする結合で、家畜・天幕・衣類等は家族に屬する。家族的財産の管理者は家父で、その死により、その總財産は長子に移る。第二の一系的家族にては家族は最早親權の下に集居することなく、唯一人のみ相續者として止まり、他は散じて新家族を構成する。この指定相續は家父の意志によるもので、必らずしも長子權に基くものではない。第三の不定的家族は總ての子女が自立の年齢に達するに従ひ、その生家を去つて各々自立自營するものである。ル・プレーは古代の牧畜時代は家長的家族であり、中世の歐洲殊に革命に至る迄の佛蘭西には一系的家族が行はれ、現代の歐洲及合衆國は不定的家族であると見る。彼はこの家族形態を更に草原・海岸・自然が變化に富める地域の三環境に關聯せしめ、草原では一家父が

ル・プレーの經濟發達階段説

一種族を統率する家長的家族が出来、海岸では一系的家族が作られる。これに對し自然の變化ある地域では不定的家族となるとし、草原が牧畜、海岸が漁獵に對應するに對し、變化ある土地では林・鑛・農・工・商のあらゆる業務が可能になり、殊に工業を職業とする家族は不定的となるとしてゐる。⁴⁾

ヴィーニユは、ル・プレー説を祖述し、敷衍して生産資料獲得方法即ち財貨生産の技術を基礎として三時代に分けてゐる。⁵⁾ 第一期は自然的生産の時代 (Age des productions spontanées)、第二期は技術的生産の時代 (Age des productions artificielles)、第三期は資本家的生産の時代 (Age de la production capitaliste) である。ヴィーニユは第二期を機械時代 (Age des machines)、第三期を石炭・蒸汽・電氣時代 (Age de la houille, de la vapeur, et de l'électricité) と稱してゐる。

第一期にては社會及勞働の種類は物的環境の變化によつて説明される。人々は手或は手用具 (engin à bras) を用ひて狩獵・漁獵次いで牧畜をなす。狩獵時代にあ

4) Greef, La sociologie économique, p. 62.

5) Vignes; Tom I, p. 110, et sqq.

La Science Sociale d'après les principes de Le Play et de ses Continueteurs. 1896. Tom I, pp. 110 et sqq.

つては父の權威弱く、家族成員が散在せるため、不安定な家族であり、漁獵も亦小舟ベックによる限り不定的家族である。⁶⁾然るに狩獵から牧畜が發達し、獲物を保存する様になると共に、草原を領域とするに至り、家長的家族が成立する。⁷⁾

第二期は家畜・風力・水力に依り動かされる機械が發明された時代で、まづ農業が現はれる。それは單純な手・手用具のみでは營み得ず、それ以前の生産方法より遙に骨の折れるものであつたから、奴隸制度を生じた。單純な社會はより複雑なる社會となる。この時代に特有なる家族形態は一系的家族である。⁸⁾次いで林業・鑛業・加工業・交通・商業が現はれ、各種の技術的發明がなされる様になるが、技術の進歩は家族形態に影響して、家族を一系的なものとする。例へば小舟が驅逐され、帆船を漁夫が用ふる結果、不定的家族が一系的家族となる如きである。⁹⁾

第三期は生活資料の生産及交通勞務に石炭・蒸汽・電氣が適用さるゝ時代で、第二期の勞働機械が、未だ人

力・動物の力又は單純な力によつて動かさるゝ紡績機又は風車の如きものなりしに對し、第三期にありては石炭・蒸汽・電氣の動力による動力機械が支配する。これは正に資本家的生産の時代であり、この時期に於て一系的家族は分解し、不安定なる家族が支配的となる。殊に土地から遊離した工場勞働者に於て然りであつた。¹⁰⁾

以上がル・プレール及ヴィーニユの經濟發達階段説の大要である。歴史を技術並に家族形態に依つて動かさるゝものと見る觀點から樹てられたこの學説は極めて特徴的である。それにはローマンチックな傾向が強く且つそれは過去に教訓を求めて、社會改良の計畫に資せんとするものであるが、生産の形態並に技術に依つて歴史を經濟的に説明せんとせしことは注目してよいと思ふ。

6) Vignes, op. cit. Tom I. pp. 114, 129, 130, 135, 195.

7) Vignes, op. cit. Tom I, pp. 124 et sqq.

8) Vignes, op. cit. Tom I, pp. 184 p. 195.

9) Vignes, op. cit. Tom I, pp. 165.

10) Vignes, op. cit. Tom II, pp. 157 et sqq.